

未来をひらく子どもシンポジウム 報告書

平成25年5月

奈良市子ども未来部子ども政策課

目 次

第1章 開催概要	1
1 趣旨	1
2 日時	1
3 場所	1
4 内容	1
5 参加者	1
6 司会進行	2
第2章 シンポジウム	2
1 市長あいさつ	2
2 基調講演	4
3 奈良市子ども条例検討の経過報告	13
4 子どもワークショップ参加者と 市長、子ども条例検討委員との意見交換	18
資料編	
1 基調講演資料	41
2 奈良市子ども条例検討の経過報告資料	62
アンケート集計結果	68

第1章 開催概要

1 趣旨

奈良市では子どもの生きる力を育み、子どもにやさしい総合的なまちづくりを進めることを目的として、子ども条例の制定を検討しています。その意義を市民の皆様と共に考えるためにシンポジウムを開催しました。

2 日時

平成25年5月19日（日）午後1時から午後3時30分

3 場所

はぐくみセンター 9階 大講座室

4 内容

(1) 開会

(2) 仲川市長あいさつ

(3) 基調講演

講師 千葉大学大学院教授 木下 勇 氏

テーマ 「子どもの参画による子どもにやさしいまち

～世界の動向から奈良の将来を考える」

(4) 奈良市子ども条例検討の経過報告

奈良市子ども条例検討委員会委員長 浜田 進士 氏

(特定非営利活動法人 子どもの権利条約総合研究所 関西事務所長)

(5) 休憩

(6) 子どもワークショップ参加者と仲川市長、子ども条例検討委員との意見交換

テーマ 「私が奈良市長だったらこんな奈良市にしたい」

(7) 閉会

5 参加者

(1) 子ども条例検討委員

	氏名	役職等
委員長	浜田 進士	特定非営利活動法人 子どもの権利条約総合研究所 関西事務所長
副委員長	木下 勇	千葉大学大学院教授
委員	奥田 眞紀子	市民公募
委員	近藤 正基	神戸大学大学院准教授
委員	原 京子	特定非営利活動法人こどもNPO 副理事長
委員	都築 由美	市民公募

(2) 子どもワークショップ参加者

氏名	性別	学校名	学年
岡田 弦太	男	二名中学校	1年
信本 詩野	女	富雄中学校	2年
藤井 朋美	女	富雄中学校	2年
石岡 由希絵	女	富雄中学校	3年
今元 玲莉	女	三笠中学校	2年
稲田 悠希	男	飛鳥中学校	2年
田尾 紗衣	女	飛鳥中学校	2年

(2) 子どもワークショップサポーター 2名

(3) 一般参加者 147名

6 司会進行

フリーアナウンサー 都築 由美 氏（奈良市子ども条例検討委員会委員）

第2章 シンポジウム

1 仲川市長あいさつ



皆様、こんにちは。

本日は未来をひらく子どもシンポジウムにたくさんお集まりいただきありがとうございます。今、司会の都築さんからもお話をいただきましたが、これまで会場の前の方にいらっしゃる委員のみなさん方と約1年をかけて、奈良市としてどのような子ども条例にすべきかを議論していただいております。なぜ今、子ども条例が必要かと言いますと、やはりひとつには、子どもという存在を社会やまちの中でもう一度しっかりと位置づけをしていくことが大事だということでございます。子どもというと、まあ子どもだからこれぐらいでいいんじゃないかというように大人

はつついってしまう部分があります。でも、ひとつひとつの大人の行動が、また、対応やその取り巻く環境というのが、子どもには大きな影響を与えるというのがあります。今、世界では子どもにやさしいまちづくりに取り組む都市が世界中にあります、日本の中でも、子どもにやさしい街は全ての人にやさしい街という視点でまちづくりをもう一度捉えなおそ

うという自治体が増えてきております。

今日の基調講演は、子ども条例検討委員の千葉大学の木下先生にお話しいただくわけですが、十数年前にロジャー・ハートの子どもの参画を、日本で初めて紹介されたのが木下先生でございます。子どもが一人の大人として、一人の市民として、社会にしっかりと参加、参画をしていけるような、そういうまちづくりをしていこうということでございます。なぜかといいますと、子どもの声は普段からあまり重みをもって捉えられることが非常に少ない。子どもがいろんな意見を言ってもなかなか大人は耳を貸してくれることがないというのが現状だと思います。我が家にも3歳と1歳の子どもがおりますけれども、なかなか、子どもの声というのは、重みをもって取られるというのが無いというのが、私も実感として感じております。ただ、これからの国づくりやまちづくりを考える中では、子どもたちがどういうまちを目指すのか、どういう国を目指すのかというのが非常に大事になってきます。なぜならば、我々が考えて取り組みをしているものの成果というのは10年20年先になってようやく得られるものだからでございます。もう一ついえば、奈良市においても毎年の予算のうち多くの部分をお金を借りて借金で事業をしておりますので、お金を借りている張本人であります子どもたちの声をまったく取り入れずに、大人だけで物事を決めてしまうということは正義に反するのではないかというようにも思っています。奈良では今、33年先のリニアのプロジェクトもやっておりますけれども、まさに今日参加してくれている子どもたちは、そのリニアが走るころにこの日本の奈良の中心となって活躍する子どもたちだと思います。そういう意味ではこのいわゆるリニア世代の子どもたちがこのまちをもっと好きになって、このまちの意見や思いをしっかりと受け止められるようなそんなまちを作っていきたいと思っております。

今日も限られた時間ではございますが、基調講演と、それから、子どもたち自身による様々な意見や提案、これを我々大人がしっかりと受け止めて、子どもにやさしいまちづくりをしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

2 基調講演

千葉大学大学院教授 木下 勇 氏

「子どもの参画による子どもにやさしいまち

～世界の動向から奈良の将来を考える」



みなさん、こんにちは。

ご紹介にあずかりました千葉大学の木下です。

今日は40分ほどここに掲げた事柄のお話をさせていただきます。まず、最初に「私は価値のある人間だと思う」という質問を、ちょっとみなさんにも聞いてみたいんですが、「私は価値がある人間だと思う」、「まあまあそう思う」という方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか。ちょっと手を上げていただけますか。・・・半分くらいですかね。はい、ありがとうございます。中学生は結構みんな上がっていましたね。安心しました。

実はこれは2011年3月に日本青少年研究所が行なった調査です。過去、いろんな世界の青少年意識の比較をしまして、毎回、その比較である日本の青少年の意識調査の結果が発表されている。日本青少年研究所だけでなくユニセフのOECD加盟国を中心にやった調査でも、日本の子どもたちは孤独である。将来楽をして生きたいとか、そういうのが他の国よりずば抜けて高いということが出ていましたので、「私は価値のある人間だと思う」という比較もどうでしょうか。韓国は高いですね。中国はもっと高い。アメリカも高い。日本は「全く」と「まあ」も合せても「思う」は30数%、40%いかない。で、「あまりそうではない」が多いですね。結構それは、いろいろな調査結果でも特徴が出ています。2009年の調査では、「自分はダメな人間だと思う」、これも、日本は高いですね。それから、「私の参加により変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」に対して「そう思う」が非常に少ない。2000年の変わり目の時にも、アメリカ、あとフランスも入っていましたね。その比較でも日本の子どもたちは「家庭に満足してない」、「学校にも満足してない」、で、「自分自身にも満足してない」というのが極めて強く出ていました。

そういう面から自己肯定感が日本の子どもは低いということが言われてきています。今回の条例作りの中でも小学校5年生、中学2年生、それから17歳と大人の人たちに聞きました。その集計をまとめたのがレポートで出ますが、これはその中の抜粋で、小学5年生のアンケートを持ってきたんですが、奈良市の傾向が見られた点ですね。これはクロス、掛け合わせているんですが、「将来このまちに住みたいと思いますか」というのに「思う」というの

が308人に対して、「思わない」が173人と少ないですね。それを「このまちが好きだ」と掛け合わせて見ます。「将来もこのまちに住みたい」と「思う」人は「このまちが好き」と答えている割合が高い。これはある程度、予想されますね。「このまちをあまり好きと思わない」という子どもは「このまちに住みたい」と思わないと。これは相関が出ています。あと、「自分のことが好き」と「このまちが好き」というのもかなり相関しています。そういう自己肯定感と「このまちに住みたい」というのが関連しています。次は「地域の将来を考える機会があれば参加したい。」との関係を見ます。社会を変えられるという意識が低いという全国の特徴の話をしました。奈良ではそういう機会があれば参加したいという意識の強い中学生に今日は参加してもらっていますが、参加したいと思うかどうか、このまちに住みたいかどうかという関係も相関が高くて、いわば「将来を考える機会があれば参加したい」という子どもらは「将来このまちに住みたい」。そういうことが言えます。あと、近所のコミュニケーションが高い子どもらは「将来このまちに住みたいと思う」という相関が出ています。それから、「将来このまちを考えることに参加したい」ってことと、近所のコミュニケーションが高いというのも高い水準で相関しています。たとえ奈良からいったん出てもまた戻ってくるような、このまちが好きで、このまちを考えることに参加してもらっていいということがいえると思います。

じゃあ、その子どもらのまちとの関わりってどうなんだろうと、ちょっとこれは私が1982年頃に世田谷で行った調査ですが、3世代遊び場マップと言います。それは1982年当時、このまちで育ったお年寄り、お父さんお母さんの世代、そして、その時の子どもたち、3世代にわたってどこで遊んでいたか、地図上に遊んでいた場所を落としていって作成しました。その場所が色で塗られています。これは昭和の初めごろ、結構、原っぱがあって、川もある。まあそういうのがでてきます。路地で遊んだり、駄菓子屋とか、川を挟んで石投げ合戦とかです。そしてこれが、その当時のお父さんお母さんの遊び場マップです。実際にその年代は、昭和30年代です。空地の原っぱで遊んでいますが、結構自然が無くなってきて、川もドブ川になってきている

けれど、それでもチャンバラごっことか豊かな遊びがあります。80年代当時ですが、自然が無くなり、川も埋め立てられて、そういった中でも、結構道路を中心に活発に遊んだり、家の裏側のブロック塀あたりでこういうように遊んだりしています。そしてですね、これは最近ですが、その82年当時に



インタビューした子どもたちが、もうお父さん、お母さんなんです。その昔インタビューしたお母さんとの出会いから、2人のお子さんをお持ちで、じゃあ、今の時代どうなの、でやろうっていうことになって、行ったのがこの4世代目のマップです。かつても20人ずつくらいに聞いてきたんで、今回も20人ずつ聞きました。昔は簡単だったんですね。こうやって通りで遊んでいる子どもらを捕まえて、僕らが借りている小屋に連れてきて1時間半か2時間くらい話を聞くと、中には、隠れ家や秘密基地に案内してくれる、そういうようなことが普通にできました。今、そんなことをしたらお巡りさんが飛んでくる。そういうこともあり、学校で放課後にインタビューをしました。また、通りで遊んでいる子どもらもいないです。

そういうように、ほとんどまちの中で遊んでいる子どもらがないことに気が付くと思うんです。こっちのアンケートの結果にも出ていますが、道に注目してください。道で遊んでいるのがほとんどなくなりました。代わりにあるのが家の中、それから学校が中心、こういうような82年当時の遊んでいた様子です。私たちは子どもたちからいろんなことを教わりました。これは細い通りですが、ウサギを飼っているおじさんがいる。で、いろんな芸を見せてくれる。そんなおじさんいたとは、何度も通っているんだけど、気づかなかった。子どもに聞くまで気が付かなかった。子どもはこういうのをよく知っているんですよ。で、通りに行ったらこのおじさんが出てきて、ケージからウサギを出して、ウサギに芸をさせてくれる。井戸端や路地は子どもが安心して遊べる場所です。で、このおじさんについても子どもらに教えてもらったんです。このおじさん、いつも昼の2時頃になると屋根の上で寝ている。それだけストリートで遊んでいればこういうのもよく知っている。道っていうのは子どもらにとって公園とは違って、いろんな大人らと接触する場で大事な場だ。だから、住宅地内の車の通行の少ない道や通学路、そういった道は、子どもが遊べるような道路、車もゆっくり時速15キロ以下で走るような道路、そういう道路にするべきなんです。

こういうのはオランダなんかではできているんですが、そういう道路にするべきだというのは日本学術会議で提言したときに、その提言の中に遊べる道路というのを入れたんです。そしたら普段学術会議の提言は、脳死判定とか国民的議論になっているものは反響があるんですが、他はあんまり反響はないんです。この時、2件ほど反応があった。その2件の内容が、「違和感を感じた。道路遊びは危険だ、騒音で苦痛を強いられている。道路遊びを禁止する法律の整備、静かに暮らす権利を実現すること」、といった意見です。「学術会議でこんな提言をするとは何事だ」とお叱りがあってですね。これは私もショックでした。いつから子どもが遊ぶ声が騒音になったんでしょう。82年当時の私が調査していた時点では無かった。そして今、子どもらは、親からもあんまり危険だからと、交通事故の危険もあるけど、不審者、犯罪の被害っていうのもあります。で、大人自身も子どもに声かけにくい、不審者に間違われる。奈良県でも犯罪が問題なんですけど、それで、大阪市も通称声掛け禁止条例といわれる条例を制定した。そうなってくると子どもらに声を掛けにくくなる。子どもも大人が何か言っても逃げていってしまう。

そういったことで、子どもたちに不審者について書いてもらったらこういうような、みんな同じようなで、確かに怖い経験、危険な目にあった経験、そういった場所から対策を考えることは大事かと思います。一方、また過剰に不審者といって道路で遊ぶなどということも問題であったり、この調査の時にこんなことがありました。「隣の中年の男のひとが不審者。だっていつもニヤニヤ笑って私を見るもん」とありますが、この子は引っ越してきたばかりで隣の人がニコニコ見ているんだと思うんだけど、女の子からしたら、ニヤニヤしている。そういうようなことが起こっている。

その辺が地域の子どもたちが、社会との関係の問題で、あんまり不審者、不審者っていわれるもんだから、子どもたちはこんな遊びを作りました。不審者ごっこ。不審者とそうでない者に分かれて、そうでない者は不審者に連れていかれないように逃げる。さらに行動や表情から不審者の中でもいい人と悪い人を見極める。これが不審者対策になっている。あんまり言われるとこういった皮肉っぽいのが出てくる。まあ、大人と子どもの関係というのは江戸末期頃に来た海外の人たちは日本の第一印象として、大人と子どもの関係が近いということに非常にびっくりして、子どもの天国であるとエドワード・モースとかイザベラ・バード。子どもに愛情が注がれる、そういった社会を絶賛していました。江戸末期ごろの良寛さん。良寛さんは40歳過ぎに子どもと遊び始めた、で、死ぬまでずっと子どもと遊んで、それから新潟周辺にいろんなエピソード。子どもらとかくれんぼをして、隠れているうちにそのまま寝てしまって、子どもらが帰って、そのまま夜遅くなって目が覚めた。子どもらから笑われる良寛さん。笑われてもなんか不思議な良寛さんだったということで、その記憶が今でも残っている。それが絵本になったりして。まあこんなようですね。子どもにせがまれて書いたんでしょね。書の良寛、詩の良寛と。僕もできるなら心を柔らかく開放して、死んでも子どもらの記憶に残っていればと思いますが。なかなかこんな良寛のように書もできず、詩も詠めない。まあ、せめてレレレのおじさんぐらいになれるかなと思うんですが、こういうふうに通りに出て、子どもらと接する大人はいっぱいいましたよね。おもしろおじさん。まあ、これぐらいでもなれたら。それでもだんだん不審者とか言われる。子どもらから接することも減っている。そのへんがいろんな問題になってきているのではないかということです。

それで、子どもにやさしいまちですが、その日本の子どもたちが幸せであるかですが、幸せ度調査ですが、多分、幸せと思っていないじゃ…中学生どうですか。幸せですか。どうですか。「幸せ」、良かったですね。このワークショップに参加している子どもたちだからかもしれませんが、1996年にHABITAT IIから始まったユニセフがすすめる国際的なプログラムで子どもにやさしいまちというのが始まります。この背景は子どもの権利条約と、90年代に一気に課題になった持続可能な地球環境問題からの持続可能な発展です。そのために地球規模で考えて行動するというようなことから、男性も、女性も、少年も、少女も全てが自分たちの都市の形成と発展の一助となるというように参画がうたわれました。そして、

OECDの中でも市民教育が始まりました。で、子どもの参画はそういう中で子どもの権利条約の12条13条にでていますが、子どもにやさしいまちは、一番に子どもの参画、先ほど市長が参画か四角が丸かとおっしゃいましたが、その参画が、なぜ参加ではなく参画なのか、あえていうのは、権利上あまり認められていない、そういうことからという意味もありますが、企画段階から参画すると、そういうような催しものに参加というような受け身的な参加もあるので、もし、主体的な意味で参加するということで参画という言葉を使っています。

そのプログラムは今、世界では1000以上の都市で、2000をこえているかもしれませんが、そういう勢いで、最初はヨーロッパの方で展開してきました。これは2008年のヨーロッパの会議で参加したときの様子です。この時にロッテルダムの市長は「ロッテルダムは子どもにやさしいロッテルダムになる」と宣言している。そのために200万ユーロ予算を用意する。2億5千万円くらいですかね。当時のレートで3億ぐらい。それからイタリアは96年、ユニセフの子どもにやさしいまちの事務局がフィレンツェにありますので。イタリアが地元で、特に北イタリアが中心に行きました。コレッジョってまちは、私の友人がファシリテーターで学校から段々展開していきました。最後に子どもたちが市長に市民の公開の前で提案をする。それから2008年の会議で私が驚いたのは、フランスのユニセフの女性が発表したんですが、就学前の幼稚園、保育園の子どもたちの参画をやっていると、その時見せてもらった写真がこれです。彼女に本当に参画できるのかなと言ったら、それはできると、で、この写真使わせてくれって言ってもらったんです。それで子どもらが楽しく語って、これを園庭の改善かなんかでやって園長が聞いて実現する。これで自分たちで変えることができたということがすごい自信になる。これを就学前にやる。フランスでは200以上の都市で子どもにやさしいまちをすすめています。

ドイツは、これはシュレースヴィヒ=ホルシュタイン州のシャップフルンドって小さな村で、実はこの学校は、子どもの数が減少して、空き教室ができていて、それで、子どもに優しい村っていうのを掲げて校庭の改善にまずとりかかった。このような水場とか、ウッドデッキを作ったりとか、子どもたちが提案しながら、地域の人と一緒に作りました。小さな村ですから、村長、議員を始め、村一丸となってやりました。だから、結構メディアにも取り上げられて話題になりました。そしたら、村長はじめ議員やみんながこんなに一生懸命やっているところ



ろなら私、子育てしやすいと移り住む人が出てきた。で、新しい住宅地が必要になって、これも子どもらの提案で子どもにやさしい道と、あまり垣根がなくて、人の家を突き抜けて近道で学校へも行ける。そのような住宅地ができたり、それから子どもにやさしい公園なんかも整備されております。

次の例は大きな都市ですが、環境都市として有名なフライブルグの中の新しい住宅地ですが、NPOが提案して環境にやさしいまち、子どもにやさしいっていうのをスローガンに掲げました。そういうところに住みたい人をこの指とまれの的に募集して、その単位で住宅をどのように作るか、日本でいうコーポラティブハウスという居住者参加の形式で作られていった町ですが、通りは一応車は通れますが、「車を持たない」をスローガンにした住宅地づくりなので、周辺に駐車場があるんですが、中は通過交通を排除した。通りにこのマークが遊び場って意味なんです、遊べるんです。だから、バスケットコートがあったり、いろんな遊びの仕掛けが道路脇にあります。

ベルリンは、園庭や校庭を、子ども参画で改善しています。

次の例はルール工業地帯の都市ゲルゼンキルヘンの子どもたちが学校を作った例。子ども参画で学校を作ったら、ここはトルコ人が多いんですが、結構、暴力とかいろんな問題があったんですが、非常にそのへんが改善されて、学校作り、いろんな教室ができて、ロフトがあります。で、授業でいやになったらロフトに行って寝ているというような。まあ、学校が終わっても家に帰りたくないというような非常に愛着のある場所になった。

それから、ドイツのミュンヘンでは、子ども家族にやさしいミュンヘンというのを掲げて、あの2000年の変り目の総合計画に、いろんなNPOの人たちが「子どもにやさしい」を主張して出来た。それまでのミュンヘンはやはり問題があった。それが改善されてきた。で、子どもの参画をずっと徹底してやってきた。子どもフォーラムというのがあって、そして、子どもをお世話するボランティアの子ども代理人がいる。そして中央には常勤の市長直轄の子ども代理人統括官って職員がいて権限を持っている。子どもフォーラムが各区からそして中央で開催され、子どもたちの意見を施策に反映する。そういう子ども代理人をおいている。そういう中でいろんなプログラムや子どもにやさしいレストラン、住環境…そういうのを子どもが審査委員をしています。子どもに優しいミュンヘン市民というの

NPO とのパートナーシップ

ドイツでは補充性の原理にて、NPOが得意とすることは任せて市の施策も分担して、委託、協働、市単独に分かれている。右図は子どもの遊びを専門とするNPOが隔年で実施しているミニ・ミュンヘン。これも市が予算の半分近くを支出している。

資料: ミュンヘン市: Hans Mayerhofer, 木下真樹 写真: Gerald Grottel

ある。子どもにやさしい大人を、例えば奈良市民から募集するわけです。で、書類が届いたら子ども審査委員が書類審査で十数人に絞り込みます。絞り込んだ中で今度はインタビューに行って、本当に優しいかどうか判断して、そして、選ばれた人がこんな写真入りのグラビアになります。

それから、ミニ・ミュンヘンはNPOが主催して、市が補助して、民間企業が寄付したりして、2年に1回やっています。そんなのもNPOが作り上げてきた文化です。そういうのも尊重しながら、行政はNPOとパートナーシップをとって、行政はNPOに託して、この赤いのはNPOがやっているもの、黄色は行政のみ、橙色が市と民間が共同でやっている。役割分担しながら、市の青少年行政を進めています。こういうこともNPOと議論をしながら、対策を立ててきた。

カナダでは、こういうチェックリストを作ってコミュニティ単位で取り組んでいます。この町でナターシャって人がリーダーで、訪問しました。空地だったところをコミュニティガーデンにして、できるだけ外に出ようという事なんです。私がインタビューに行って話を聞いていたのは庭です。そこでずっと話をしていました。道行く人が話かけてきて、何人もの通行人とも話をしました。結局、家の中には入りませんでした。3時頃になったら10人くらい子どもが来ておやつを取りに来て、また遊んだり、すごい子たくさんだなあと思ったら、今日は私の当番なんですとナターシャが言いました。変わりばんこに子どもをみる関係ができています。これも診断チェックをしてからそんな関係ができた。子どものチェックから近隣の関係ができてくる。下は子どもの参画でスケートボードパークが作られたものです。

イギリスは通りでストリートパーティというのをやって、これはイベントで2日間やったんですが、このストリートパーティをやって人間関係が良くなった。で、車に取られてしまった道路を、また車と人が共存というか子どもが通りで遊べるようなホームゾーンを展開しています。それから子どもコミッショナー。あのミュンヘンの子ども代理人と同じように代弁者として政策に反映する権限を持った人を置いたりしています。

さて、アジアの方が遅れていたんですが、2009年に初めてアジア・パシフィック地域の子どものやさしいまちの会議を始めてやりました。その時に参加したインドネシアの子ども女性省の子ども保護課長オスマンさん、自国に持ち帰り、2年後には、自国で会議をやりました。その時にびっくりしました。もう400人近い参加者で、子どもフォーラムっていうのも展開して、青少年が270人くらいが



集まってワークショップで子どもたちの声を会議に反映させようとしていました。現在は74の市町村で「子どもにやさしいまち」のプログラムを進めています。日本は追い抜かれてしまう。こういう勢いで展開しております。それから社会的養護施設のSOS子ども村。子どもをかくまう、そういう施設。そういうところでも参画が進んで、この子どもはナマズの養殖とかアヒルを飼っている。それを売ったりして資金にして、そういうことをしています。

次は南三陸町、時間があつたらお見せしようと思っていたんですが、子どもの参画の復興まちづくり。日本ではなかなか首長が子どもにやさしいまちをやると宣言してですね。まあ、私はそういうことを正式に宣言してやっているところは皆無だと思います。ようやく日本ユニセフ協会も関心をもって、一緒に連携とりながら子どもにやさしい復興まちづくりを進めています。

ワールドビジョン・ジャパンという国際的NGOも、子どもの参画のミッションを進めています。そこで頼まれたのが、南三陸町の子ども参画です。ここではこういう地域の昔ながらの伝統での獅子踊りの継承もされています。ここは被災して、学校は隣の市の廃校を使っているんです。車で40分かかるところに地域の人に来て、子どもたちにこれは絶対してはならないと、獅子踊りの指導を小学生が受けています。それから、中学生、高校生がダルビッシュのいるテキサスに招待されて、テキサスの球場で、ダルビッシュの前で獅子踊りを踊った。そういうことが起こったり、ちょうどこれは私が手伝いで、初めて子どもたちが、昔からこの辺りは漁師の人たちが磯遊びから素潜り、シュノーケリング、スキューバダイビングそういうのを教えるふるさと学習というのをやっているところなんです。で、そういうところだから、漁師の後継者不足問題はない。私が聞いたときもみんな漁師になると言っている。そういうのをやっていたところなんだけれども、被災して、半年後ぐらいに初めて子どもらが海に出るという時に、一緒に中学2年生が関わって地域の事を考える、またふるさと学習を再開しました。学校に帰って構想を練るということをやりましたら、子どもらはキャラクター作り、先生が昔、ストリートバンドで歌が得意だからと言って曲を作れと言って、それでできたのがこの曲です。最後には子どもらも一緒になって、世界中のひとにありがとうという言葉を入れて終わっています。



この戸倉地区は漁業資源には隣の志津川や卯立地区に比べて豊かにはない地区であったが、わかめや鮭の養殖で漁業を起こしてきた。そこで子どもたちに磯遊びから、素潜り、最後にはスキューバダイビングまでのふるさと学習を25年も継続してきた歴史がある。この日は被災後、初めてのそんなふるさと学習のような、漁師さんの船に乗せてもらう機会となった。漁師さんも船は大半が壊滅的被害を受けて、2割ほどしか残らなかった所、中古船の支援や、修復で5割ほどに復旧してきた時である。

それから、ジュニアリーダーという仕組みもありまして、ジュニアリーダーというのは宮城県発祥で、子ども会から育った中高校生が、子ども会の世話だけでなく地域のボランティアサークル。行政の方で教育委員会の職員でサポート役がいてジュニア・リーダーの育成がはかられています。それでその



ジュニアリーダーを中心にまちづくりの提案を半年かけて、月数回のワークショップで策定しました。ちょうどみなさん中学生たちがまちづくりをやっているのと同じように半年間。最後はこういう風に市民の前で演劇スタイルで発表して検討を加え、最後に町長へと提案書を提出しました。そうしましたら、3月6日、ニューヨークの国連水と災害の特別会議で、そこに皇太子さんもスピーチで招待されて、そしてこのジュニアリーダーの2011年度のリーダーの子の愛称ジャガーがスピーチに呼ばれて、専門家とかがいる前で発表しました。NHKのニュースに出ていてビックリしてまあ、そのあとにジャガーにメールをやったら、「いい経験をしました」と、「これから南三陸町のために頑張りたい」と返答が返ってきました。

そのように子ども参画を日常的に、子ども、若者の参画が大事だと。子ども、若者は地域のかすがいで、子どもは地域の将来を背負う人材になる。ただそれだけじゃなくて市民でもある。パートナーとして一緒に問題を解決していくということです。日本でも条例作りは結構進んでいます。子どもの参画も言われている。だいたい条件はそろっていて子どもの居場所作りとか子どもにやさしいとか、あとは首長とかみなさんの理解とか、みなさんがその気になってやることかと思えます。奈良市もこれから子ども条例作りからいろいろ展開して、いろいろ問題解決にあたる。子どもを育てるには一つの村が必要というアフリカのことわざがありますが、コミュニティが先ほどのように隣の人も不審者というような状況になっていたら、それを変えるにもコミュニティを育てるのにも子どもが必要かと思えます。最後までご清聴ありがとうございました。

3 奈良市子ども条例検討の経過報告

奈良市子ども条例検討委員会委員長 浜田 進士 氏
(特定非営利活動法人 子どもの権利条約総合研究所 関西事務所長)



私は奈良市子ども条例検討委員会の委員長を務めております浜田と申します。委員会発足後1年が経ちましたので皆さまに経過報告いたします。

先ほど木下先生の話をお聴きして3つの風景を思い出しました。一つは、先日視察したスイスとオランダのまちの風景です。子どもにやさしいまちの先進事例を訪問前に木下先生に教えていただき、現場を見てきました。自転車専用道路・自動車が進入しにくい生活道路・巨大砂場など。二つ目は、自分の幼いころの風景です。河原の砂浜で、友だちと大きな山をつくり、トンネルを作りました。悪戦苦闘しながら、ようやくトンネルがつながり、友だちと向こうで握手した肌感覚を思い出しました。

そして、3つ目が、東日本大震災で、震災直後に現地の中高生世代の子どもたちが復旧・復興のために、おとなたちから頼りにされ、活動している風景です。子どもにとって「遊び」の大切さ、地域を「子どもと一緒につくっていくこと」の大切さを木下先生からあらためて教えていただきました。

奈良市の子ども条例とは

それでは、15分ほど報告をしたいと思います。この1年間、奈良市において「子ども条例」を作るということに取り組んできました。「奈良市子ども条例」とは何でしょうか？それは、第1に、「奈良の子ども支援・子育て支援の土台を作る」ことです。2番目に、木下先生がおっしゃったユニセフが提唱している「子どもにやさしいまち」の理念を奈良で実現したいという思いです。3番目に奈良のまちを「子ども・市民と一緒に作っていく」という宣言です。4番目に、奈良の子どもの「未来への方向」を示していくこと、最後に「奈良らしさ」とカタチにすることが、奈良の子ども条例のねらいであり、この1年間、様々な子どもの実態を調べてきました。

それでは、「なぜ子ども条例をつくる必要がある」のでしょうか。少し難しいですが聴いてください。まず、子どものことを「総合的」に取り組む必要があるからです。子どもをめぐる「縦割り行政の壁」があります。教育は教育だけ、福祉は福祉だけ、医療は医療だけというようにバラバラに取り組んでいます。子どもにとって何が「子どもの最善の利益なのか」を総合的に取り組む必要があります。条例を通して縦割りの弊害をクリアにしたいとい

うのが一つです。2つ目は「継続性」です。子育て施策・子ども支援策は、担当者が代われれば子どもたちの取り組みがコロコロ変わっては困るんですね。継続的で安定した子ども施策を推進するために条例が大切なのです。3番目に、「実効性」が条例設置の理由です。子どもは発達途上にあるために、子どもの声が施策になかなか反映されません。いじめや虐待にあっても無視され相談・救済されない場合があります。子どもが「たまたま」とか、「思いやり」で支援をうけるのではなく、奈良の子どもが例外なくすべての子どもが支援される仕組みを作りたい、ということです。

昨年3月から概ね2か月に一回、こちらの前列にいらっしゃる検討委員の皆さんや関係部局の方々と検討作業を行ってきました。これまで大人の会合としては9回やってきました。第一に取り組んだことは、「奈良市の子どもの現状把握」です。私は大阪豊中市や泉南市などの子ども条例づくりに関わってきましたが、他市に比べて、この1年非常に丁寧に子どもの実態を調査してきたんじゃないかと思っています。現在は、その調査をふまえて、どのようなことが「子どもの課題」なんだろうかと分析・整理しているところです。今後は、いよいよ「子ども条例の条文作り」に取り組んでいきます。

「子どもの現状把握」は、具体的にどんなことをしたかと申しますと①子どもワークショップ②インタビュー調査③アンケート調査の3つです。概要は、市役所から報告書として公開されますから、ぜひご覧ください。

子どもワークショップ

条例検討委員会は、まず「子どもワークショップ」を「子どもの現状把握の出発点」にしました。それは「奈良の子どもことは奈良の子どもたちがもつともよく知っている」からです。子どもと子どもの話し合いの中から、私たち大人が子どもの課題を学び、子どもたちに参加してもらいながら、奈良の未来を考えていこうというワークショップを6回行いました。本日後ほど1時間、ワークショップの子ども委員のうち7名が参加してくれましたので、その時の様子を報告していただきます。

そもそも、「子どもの参加・参画」とは何でしょうか。これは、千葉県の高校生が考えた言葉ですから、ぜひメモしてもらいたいのですが、私は賛同して使っています。①「子どもの参画」とは「子どもの気持ちを大人がちゃんと聴くこと」です。子どもの最善の利益は、子どもの意見を尊重することで具体化されます。②「子どもの参画」とは、「気持ちと気持ちをつなぐこと」です。子どもの気持ちや考えがすべてそのとおりにはありません。他者と他者とのつながりの中からはいいアイデアが生まれます。また、いろんな大人との調整も必要ですね。③「子どもの参画」とは、「気持ちを形にすること」ですね。子どもの気持ちを様々な形で表現し、まちづくりに反映させていくこと。できない場合は、大人がきちんと応答責任・説明責任をはたすことが子どもの参画ではないでしょうか。

奈良のまちで、「子どもの気持ちを聴き」、学校の枠をこえて「子どもの気持ちと気持ちをつなぎ」、話し合いを通して「子どもの気持ちをカタチにしていく」ことが、今回の「子ども

ワークショップ」です。公募で集まった34名の子どもたち（小・中・高校生世代）が、昨年7月31日～11月17日まで6回の会合を行ってきました。「奈良市と私の今を考える」「奈良市と私の未来を考える」「私たちの力で奈良の未来をひらいていこう」とテーマに話し合いを重ねました。

ワークショップでは、例えばこんな意見が出ました。「平城京を民俗村にして欲しい」「いじめ問題は自分たちで解決したい」制服も、奈良は私服の中学校もありますよね。その中学生は「私服をやめて欲しい」という意見があったり、逆に別の中学生は「制服をやめてほしい」という意見がありました。それから「蛇口をひねったら大和茶が出るようにして欲しい」というのがあったり。私の実家は農家なので、この意見はそれはうれしいことなんですけど、蛇口から大和茶が出たらどうなるんだろうと少し心配にもなりました。（笑い）そのほか「自転車と歩行道路をちゃんと分けて欲しい」「大きなプールが欲しい」。私も欲しいです。それから、「遊べる場所が少ない」「交通機関をもっと便利にして欲しい」お小遣いが足りないのか、あるいは、なかなか最近子どもたちも生活が大変な状況ですから「子どもも働かせて欲しい」という意見も出ました。他にもいろんな意見が報告書に出ていますので、ご覧いただきたいと思います。私は、進行役である川中大輔さんがワークショップを子どもたちと進めている様子を一度視察させてもらいました。子どもたちとじっくり時間をかけて取り組んでいるな、「子どもの思いを待つこと」を大切にしているなど実感しました。子どもたちが、小グループで話し合うのを見ていまして、本当に学ぶことが多かったです。

ワークショップから見えてきた子どもの思い

このワークショップから見えてきた子どもたちの思いは以下のものです。①「大人たちが想像している以上に子どもたちは深く考えている」ということです。先にも述べましたが、奈良の子どものことは子どもがよく知っていると再認識しました。②「子どもたちは、おとなに言いたいことはいっぱいあるんやなあ、そしてそのことを大人は理解できていない」ということです。子どもから言われて気づく、また言われて気づく、ということの繰り返しなんです。こういう仕事をずっと20年やっていますが、やはり子どもたちから気づかされます。そして、③やっぱりというか以外というか「子どもたちは奈良が好き、好きだからこそいろんな問題点を知っている」ということです。子どもたちの批判精神は鋭いものがあります。④「子どもたちは奈良のまちを良くしたいと考えてくれている」わけですね。ですから、子どもをもつばら「保護する存在」「教育する存在」とだけみるのではなく、⑤「あてにする」「一緒になにかに取り組む＝頼りにする存在」として子どもを見て欲しいということを感じました。

条例にどのように活かすか

ワークショップで表明された子どもの気持ちや意見をどのように条例に活かしていくべきでしょうか。

まず、子どもたちが、安心して自由に思いを言える居場所づくりが求められています。先

ほどの木下先生の講演の際にみた「昔の路地や空き地」の写真を思い出して下さい。子どもたちが自分の気持ちを伝えるには、「居場所」が必要です。そして、「遊ぶ時間」が大切です。国連子どもの権利条約には「リクリエーション」の権利という条文があります。休むこと・余暇・文化的生活の確保という意味です。「遊び」つまり「リクリエーション」っていうのは、「リ・クリエーション＝再び創造すること」です。人間にはすこし休憩して「自分が何だろう」と振り返ったり創造したりする時間と場が大切だと子どもの権利条約は伝えています。子どもたちが、急に大人に気持ちや意見が言えるわけではありません。まず、安心できる子どもの居場所づくりが課題です。先ほど木下先生のお話では、2、3歳くらいの子どもたちが話し合いをしている様子をスライドで見ましたが、日本で急に同じようなことができるはずがありません。子どもたちは、待ってもらったり、失敗を繰り返すという積み重ねが大事だと思うんですね。一方、私たち大人も子どもの意見を受けとめる経験が必要です。また、いきなり奈良市全体で話をするのも大変です。地域協議会などを活かしながら、学校単位から奈良市全体へ積み上げていくことを大事にしたいなと思います。それから、0歳から6歳までの子どもの意見ですとか、外国籍の子どもの意見ですとか、「多様な意見を聴く仕組み」が大事かと思います。そして、「子どもにわかりやすい条例」ですね。子どもの言葉で子どもと共に作っていったらいいなというように思っています。そして、「保護者とか学校関係者、各事業者の役割や責務」を明確にしていきたいですし、「いじめや体罰などに対応する」既存の子どもの相談をする窓口が、子どもにとって本当に子どもが相談しやすい窓口になっているのだろうか、という検証も必要であること言うことも、子どもたちから教えられました。

インタビュー調査について

子どもの現状把握として取り組んだことの2番目はインタビュー調査です。条例検討委員の方々と一緒に、困難な状況にある子どもへのインタビューということで、児童相談所・児童養護施設ですとか、不登校の子どもたちですとか、非行をした子をもつ親の会の保護者の方、あるいはさまざまな社会的養護の施設で聞き取りを行いました。ワークショップに参加しにくい、アンケートでは把握しにくい、奈良市の中で声が届きにくい状況の子どもや保護者、関係者から意見を聴こうということになったわけです。恐らくこういう調査で、母子支援施設ですとか児童養護施設の協力で「子ども当事者にインタビューさせていただく」というのは非常に珍しいことではなかったかと思います。明らかになったことは、奈良市内の社会的養護を必要する子どもたちが、天理や生駒など奈良市以外で保護していただいているという現実です。それから非行と向き合う保護者の会の方や不登校、引きもこりを考える親たちとも話し合いを行いました。そこからも、いろんなことが見えてきました。「ルールからはずされた」子どもは奈良では暮らしにくいということです。不登校の子どもが、「受験勉強などが熱心で、奈良は『普通のハードル』が高い」って発言されたのが非常に印象深いんですね。全国的な調査でも奈良市はトップクラスで教育熱心な地域なんですが、それゆえに競争から脱落した子どもや家庭にとっては暮らしにくいかもしれません。それから、「失敗した、

弱いということを出しにくい地域ではないか」ということを感じました。ですから、いろいろな障がいをもっている方、あるいはさまざまな課題を抱えている方をどのように支援していくかということが見えてきたわけです。奈良市の条例は、子どものために、親や保護者にしっかり頑張ってもらおうとするのか、そうした親をまわりは支えようと応援するのか、「保護者の責任」のあり方はこれから条例条文のなかで、議論になることでしょう。ある非行の子どもをもつ親の会の方が、家庭の中で子どものあり方を何とかしようと焦り、子どもを責め立て家庭環境や親子関係がますます悪化していくという悪循環を抱えている状況を語っていただきました。親たちが子育てに疲れ、うつ状態で悩み、いったん子どもが非行に走ってしまうと「私たちは子育ての敗北者です」と叫ばれたのが忘れられません。孤立した保護者をどのように支えていくかということが課題じゃないかと感じました。

そして、現状把握の3つ目は「アンケート調査」です。小5、中学校2年生、17歳、大人の市民に向けて子どもに関するアンケートを行いました。アンケート調査は先ほど木下先生から言っていただきましたが、これはこれから様々な分析が必要なところです。これまでの既存の調査を活用し、あるいは、以前報告書が提出されました「奈良市ひとり親家庭実態調査書」ですとか、既存の様々な調査を利用するとともに、昨年12月18日～今年1月8日にかけて独自調査も行いました。いずれ報告書が出ますので、今後アンケート結果を分析しながら市民の皆さんに報告をしていきたいと思っています。

子どもにはチカラがある！

最後に、今から子どもたちが登壇して市長と話し合いをしていただきます。こんなことを今から述べると、壇上に上がる子どもたちにプレッシャーを与えるかもしれません。(みなさんリラックスして欲しいんですが、)参加して下さる「子どもにはチカラがある」など痛感します。もちろん子どもは「未熟で成長途上にある存在」です。と同時に「積極的に社会に関わっていく存在」「あてにされる存在」でもあります。このワークショップや条例の検討作業を通して、「もっと子どもをあてにして良いのではないか。子ども自身が豊かな関係を紡ぎだしたりしていく存在ではないか」ということを発見しています。この子どもたちと一緒に参加しながら、奈良市の課題を解決していきたい、という風に思っています。自分が好きだと言える自己肯定感情を育み、「生きることの土台」をつくっていきたい。大人も子どもも「ありがとう」「よくがんばっているね」とまちの中で声かけ合えるような環境を作っていきたいと思います。それでは以上で報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。

以上

4 子どもワークショップ参加者と市長、子ども条例検討委員との意見交換

テーマ「私が奈良市長だったらこんな奈良市にしたい」

都築氏 先ほども少しご紹介がありましたけども、奈良市では子ども条例の制定に向けまして、子どもたちが普段から感じていること、いろんな思いですとか課題、そのニーズ等を把握するために、昨年の夏休み期間を中心にいたしまして6回にわたって「子どもワークショップ」を開催いたしました。このワークショップに34名の子どもたちが参加してくれました。そしてお手伝いくださったサポーターの大学生のお兄さんお姉さんも客席で温かく見守ってくれております。その中で今日は7名の中学生がこの意見交換に参加してくれています。そしてこちらは、仲川市長はじめ、浜田委員長、そして木下先生にも加わっていただいて、テーマが「私が奈良市長だったらこんな奈良市にしたい」ということで、子どもたちにはいろんな意見を考えてきてもらっているんですが、できればお互い双方向で、意見のやりとりなどしながらですね、言いたいことは全部言ってください。なるべくざっくばらんにこれから一時間ほどですけれども、皆さんと、私たち大人代表がここでいろんな話ができればいいなって思っています。とても頼りにしていますので、どうぞよろしく願いいたします。まずは、おひとりずつ自己紹介兼ねて、夏のワークショップに参加して感じたこととか気づいたこと、それから先ほどの木下先生の話聞いてその感想も含めて、じゃあまずはAさんから自己紹介兼ねてお話しください。



子どもA こんにちは。学校では生徒会長とボランティア部の部長をやらせていただいています。この前のワークショップに参加したのは、親や先生から勧められたのがきっかけだったんですけど、本当はすごく行きたくなくて、

ああもう嫌だなあとか思っていたんですけど、でもいざ参加してみたら他校の方とお話しするのがすごく楽しくて、得られるものも大きかったので参加できてよかったと思います。今回も親に勧められて参加することにしました。本来はこうして人前で意見を発表することは苦手なのでうまく話せるかどうかわかりませんがよろしくお願いします。

都築氏 はい、ありがとうございます。今、やっぱり後悔してる？今日も勧められて出てきて。

子どもA 大丈夫です。

都築氏 大丈夫ですね。ではよろしくお願いします。Bさんです。よろしくお願いします。

子どもB こんにちは。私は昨年発足したボランティアクラブの副部長をしています。ボランティアクラブの主な活動は花咲きロード事業と富より団子の販売促進です。花咲きロード事業とは、校区に一年中花が咲き続けるように、地域教育協議会の方と一緒にしている活動です。中学校の中庭や、周辺道路に花を植えたり水やりをしたりしています。富より団子は平成23年に中学1、2年生約40名のプロジェクトチームによって開発された中華菓子で、学園前の中華料理店などで販売いただいています。先輩方が作った富より団子をもっと多くの方に知っていただけるように販売先の新規開拓を行っています。今年のワークショップでは、私は一斑になり、班員5名のうち3名が小学校高学年でした。小学生が入っている班は7班中この班のみで、出た意見には公園でのボール遊びや遊具に関するものが多かった点が特徴的だったように思います。今年の時点で私は中学1年生であり、小学校を卒業して間もない頃でしたが、小学生が感じているような公園、遊具の不満について忘れかけていました。それはおそらく大人の方にも言えるのではないのでしょうか。子どもからの問題提起をきっかけにして、忘れかけていた子どもころの気持ちを思い起こしながら私たちの意見に耳を傾けていただけると幸いです。ワークショップに参加してみて、やっぱりそれぞれの年齢で問題と感じていることが違うのだなと感じました。幅広い年代の子どもに意見を聞くこと、それが一番大切ではないかと思えます。以上です。

都築氏 はい、ありがとうございました。木下先生が大きくならずいらっしやいました。Cさんです。お願いします。

子どもC こんにちは。ボランティアクラブに入っています。前回ワークショップに参加してみて今回もシンポジウムに来たんですけど、前回も今回もみんなと違って、自分の意志で来ました。前回のワークショップでは頭に浮かんでいることはいっぱいあるんですけど、言葉にしづらくてあんまり伝えられなかったんですけど、今回はうまく言えたらいいなって思っています。

都築氏 ご自分でこういうところに参加したいなって思ったのは、Cさんの何がそうさせるんだろう？

子どもC やっぱり、自分がいいまちに住みたいなって。今、仲のいい友達がいっぱいいるんですけど、都会とかに行っていなくなったら寂しいし、みんな一緒にこのまちに住みたいなって思ったから、自分たちが住みやすいまちを作りたいなって思って来ました。

都築氏 はい、ありがとうございます。続いては、Dさんです。お願いします。

子どもD こんにちは。陸上部と生徒会本部役員に所属しています。隣のCさんがみんなと違って自分の意志で来たって言ってるけど、私もちゃんと自分の意志で来ました。今日も親に勧められたとかじゃなく自分の意志でちゃんと来ました。ワークショップは単純に楽しそうだなって思って参加しただけだったんですけど、予想以上に同年代の人がみんな積極的でとても楽しい意見交換ができたと思っています。これが私の中で、生徒会本部役員に立候補した大きなきっかけになったと思います。すごく感謝している。今日も楽しみに来ました。

都築氏 はい、ありがとうございます。すごい。それで生徒会役員になってくださったんですね。では続いてEさんお願いします。

子どもE こんにちは。部活はソフトボールをしていて、クラスでは副室長をしています。ワークショップに参加した感想は、今の子どもたちの意見を尊重しないと未来は成り立たないと思いました。私は今の大人たちの金銭的な感覚や、技術面を考えての行動より、今の子どもたちの想像力や明るさに未来を託すほうがこれからの奈良がよくなるのではないかと考えました。私はよく口だけという言葉を目にしますが、それは今を築いている大人たちなのだと思います。理由は、小学校で奈良にこんな施設が欲しいという意見を求める授業がありました。けれど、今はビブレは潰れたし、他に遊ぶ場所も校区外が多くなっています。それでは、私たちに意見を求めたのを無駄にただけではなく、自分たちが想像した奈良への期待が高まるだけで

かなうのかなと不安になります。今から子どもが未来を築いていくというのならば、大人の意見も聞くが、なるべく子どもの意見に耳を傾けて欲しいとワークショップで考えました。

都築氏 はい、ありがとうございます。子どもの意見を聞きっぱなしではなくて、一緒に手を携えて奈良の未来を創っていきたいですね。続いてFさんお願いいたします。

子どもF こんにちは。学級委員長をやらせていただいています。クラブ活動ではバスケットボール部に入っています。ワークショップに参加した理由は6年生のときに委員長になったら先生などに勧められたからです。しかし、まだ6年生になったばかりだったので奈良のことは全くわからなかったけど、ワークショップに参加して頭にきたことや奈良のことを真剣に考えるようになりました。授業でもちようど奈良のことを習い始めたので、たくさん奈良のことについて発表できました。また、ワークショップでは子どもの意見をいっぱい聞いてくれたので、すごくワークショップに参加したかいがあったと思います。以上です。

都築氏 はい、ありがとうございます。小学校から中学生へ、大きな成長になりましたね。それでは続いてGさんお願いします。

子どもG こんにちは。学校では、学級代表をやらせてもらっています。僕は最初ワークショップで緊張してしまって何もしゃべることができなかったけど、だんだん回を重ねるうちにみんなとしゃべりやすくなってきて、意見をよく言えるようになってきました。人見知りしてしまっているいろんな人としゃべれなかったけど今ではいろんな人と少しだけしゃべれるようになりました。これもいろんな人と話をするワークショップに参加したからだと思いました。

都築氏 ありがとうございます。みなさんそれぞれにワークショップをとおして仲間ができたり、自分で自分の成長を感じられたりすごいなって思いました。けれども、まずは今の7名のお話を聞いて、仲川市長から順番に感想、あるいはもうちょっと聞いてみたいと思うようなご質問などありましたらお願いいたします。

仲川市長 そうですね。子ども扱いって言葉がありますけど、子どもはこれぐらいのことしかできないだろうって、大人はわりと過小評価するってことがあると思うんですね。でも今話を聞いていると、ちゃんと大人が聞く

耳さえ持てば、子どもたちもいろんな考えを持っているし、今の世の中に対しても不満も怒りもたくさんあって、自分たちならこうするっていうのを実はすごく、先ほど言葉には出せないかもしれないけれど頭の中や心の中にたくさん持っているっていうのがひしひしと伝わってきました。逆に言えば今までこういった人たちの意見をないがしろにして、あまり聞かずに、大人だけで一部の人だけで物事を決めてきたっていうのも反省点だと思います。今日はいろんな意見を聞いて、大人と子どもと一緒に考えていけたらなあと思っています。

都築氏 ありがとうございます。では、順番にお願いいたします。

浜田 みなさんの振り返りのアンケートを見たときに同じような言葉がでていたんですね。みなさん方の誰かが言った言葉なんですけど、「今の奈良では子どもの方が正しいことを言っていると思うのに、大人の方が正しいという考えで、言ってもほとんどすべて却下されるから頑張ってきました。」あるいは、「もっと自分たちの考えていることを聞いてもらいたい。子どもが言うとながままだと思われるかもしれないけど、あるいは子どものくせになって言われるかもしれない、でも、私たちも人権をもち、意見をする権利をもっている、ひとりじゃできないけど、みんなで発表してまとめれば・・・だから必要だと思う。」というようなことが出てるんですけど、子どもにとっての最善の利益っていうのは、もちろん大人が決めるっていう責任はあるんですが、そのためには子どもの思いを聞くことで具体化されるっていう言葉がジュネーブの文書にあるんですけど、やっぱり、子どもの声をきっちり聞くっていうことで、いろんな施策が良いようになっていくんだと思います。で、おっしゃったように、聞きっぱなしっていうことがよくないので、応答していくのが大事だと思いますし、今日だけでもそうだと思うんですけど、子どもワークショップをやっていて、高校生世代の意見、それから中学生の意見、小学校でもいろんな世代の意見が多様だになっていくことも気づかされました。

都築 では、木下先生お願いします。

木下 いいですね。今日は、みんなの言葉でもはっとさせられることがあって。副委員長 僕は千葉ではサミーって呼ばれてるんですけど、南三陸町では、木下さんとか木下先生って呼ばれて、それよりサミーって呼ばれたほうが近くなって、そうするといろいろ言ってくれるんです。先生たちもあだ名で呼べるようになったら、もう少し先生との会話も弾むんじゃないかと思うんですけど。サミーって呼んでください。聞いてると、いろんな場面で、さっきも

はっとさせられる意見があったんだけど、小学校の頃の忘れかけていたことを思い出した。そのとき大人に対して言いたかったことやいろんな問題を感じていたことが、過ぎちゃうと中学生になったら中学生になったで大変だからって。だから大人はみんな子ども時代のことは、みんな忘れちゃっているんだよね。だから、小学生と一緒にやったりとか、高校生と一緒にこういうこと考えたりすると、ちょっと前のことを思い出して、当の昔に忘れていた大人たちに思い出させるっていうのも大事なことでなって思いましたね。それも気づかされました。それと、ひとつ質問なんですけど、ワークショップに参加したのは親に勧められてとか先生に勧められてとかだったけど、だんだん他の子たちといろいろ言えるということはいいい機会だったということがありました。他の友達はどうだった？こういう場があったらみんな参加するだろうか？どうやったら多くの友達が関心をもって参加してくれるだろうか？なんかいいアイデアとか方法とか考えはない？

都築氏 どうでしょう。みんなの中にも、もっと友達もこういうのに参加したらいいなって思ってると思いますけど、どうやったら身近な友達も参加してくれると思いますか。意見がある人どうぞ。

子どもB 学校の友達とかもこういう機会があったら参加したいと思うと思うんですよ。でも、こういう機会があるということを知らないと思うんですね。だからもっと宣伝したほうがいいと思います。

都築氏 はい、ありがとうございます。Cさんもお願いします。

子どもC みんな、こういう堅苦しいところでしゃべるのは苦手だと思うんですよ。だからまずは、家みたいなリラックスできるようなところでやって、だんだん時間がたっていったらこういうところでも話していけると思うので。最初からこういうところは抵抗があるので、慣れたら大丈夫だと思うのでそういうふうやっていったら良いと思います。

都築氏 家のようにくつろいだ雰囲気ね。学校ではそういうことってどうだろう？できそうかな？

子どもC 学校は、家っぽくはないんですけど、慣れているから。何年も通ってるからこそリラックスできるし、言えるのかなと思います。

都築氏 まずは、しゃべりやすい場所でってことですね。

- 木下 副委員長
子どもC 学校で、先生たちもいる場で、そういうふう自由に言える？
結構先生たちと仲がよいので、あだ名もあるし、みんな言えるかな。
- 都築氏 他にはどうでしょう？こういうところに参加して自分の意見を言える、言いやすくする、子どもがどんどん出てきてくれるには何かこんなことをしたらってという意見があれば。はい、Fさんお願いします。
- 子どもF 近くの公民館とかに広めていって、どの地域でもそういうことを話し合ったりできるようにして、夏休みのワークショップみたいに、子どもが来たとき用にお菓子を置いといたら、小学生も来ると思います。
- 都築氏 お菓子も大事ですよ。ありがとうございます。それではDさんお願いします。
- 子どもD やっぱりお菓子が重要だと思います。子どもってデメリットしかないところに自ら飛び込んでいくようなことはしないと思うので、「お菓子いっぱいあるからおいで」みたいにしておいて、話を進めていく。もうお菓子で釣られて来ちゃったからには、話をするしかなくなるし、お菓子は大事だと思います。
- 都築氏 はい、わかりました。貴重なご意見でございました。Aさんお願いします。
- 子どもA 一回、全員、強制的に参加させたら良いと思います。私も、半強制的に参加して、考えが変わったので、その中の7割くらいは考えが変わると思います。
- 都築氏 ありがとうございます。どうでしょう今の中学生の意見を聞いて、こちらの側でご意見のある方。
- 仲川市長 地域ごとでやるっていうのはすごくいい事だと思います。今回はみんなバラバラの学校だから、そのことで新しい仲間が増えるって言ういい部分もあると思うけど、例えば、この地域にしかないもののお話だとか、その地域の人しか知らない話だとなかなか話が合わないこともありますので、Fさんが言ってくれたように、地域ごとで子どものワークショップをして、学校のこと、まちのこと、みんながいろいろ意見を出してもらえるようにできたらいいなと思います。

浜田
委員長

みなさん、お菓子でいろいろ批判もあるかもしれないですけど、一回目、どうやったら参加しやすいかということ、川中さんがルールづくりをされたんですね。長い間、大人に対する不信感もある、でも何か言いたいという子が学校を超えて来たときに、安心できるなどか、この人だったら聞いてくれるなっていうときにお菓子が出たわけですよ。市の職員の方が一生懸命予算交渉をしてお菓子を買ってくださったので、たかがお菓子なんですけど、お菓子っていうものの中に、この人たちは私たちが言うことをちゃんと受け止めてくれるっていう意味合いがあるので、そういう意味も含めてのお菓子やんな？いや、お菓子って大事です。



子どもD

集中力がつく。

浜田
委員長
都築氏

集中力か。ありがとう。

木下先生いかがですか。

木下
副委員長

ヨーロッパやアメリカなんかは、市民活動ワークショップの走りで結構ありますね。学会やなんかでもワークショップをやると、コーヒーなんかでできたりする。お菓子っていうものは付き物なんです。日本で、開催して大学でやると、コーヒー代やお茶代も含めてそういうのが出る仕組みがないんです。お菓子が必要だ。どうやって予算化するか。日本で難しいよね。理屈ではわかるんだけど出ない。それは創造的環境になかなかできないっていうのがあるんですけど。なんとか工夫して、集中力とか、休み時間とか必要ですね。

都築氏 みなさんからの発表について他にご質問が特になければ。

浜田 じゃあひとつだけ。Fさんが腹立っていることがあるって言ってたんです
委員長 けど。

子どもF 小学生の時に、休み時間に公園とか学校で遊んでる時に、サッカーで思
いっきりボールを蹴ったら中学校に飛んでいってしまうから、その後先生
に怒られて授業にぜんぜん行けなくて友達に迷惑とかかけたりしたから、
野球部みたいにネットを張ってボールが飛んでいかないようにしたらいい
のかなって小学生の時に思っていました。

都築氏 ありがとうございました。それは、先生にも言ってみた？

子どもF それはちょっと。予算も。

都築 予算・・・気を遣っちゃったわけですね。そうかそうか。でもいろんな
自分の経験をとおして、こうだったらいいなってことを、いろいろ気がつ
いてるわけですよ。そうしましたら、私が奈良市長だったらこんな奈良
市にしたいという意見をそれぞれに考えてきてもらっています。どんな意
見ができるか楽しみなんですけど、単に、こうしたいっていうだけではなく、
その中でいろいろな思いを託して、それぞれ述べてくれると思いますので、
そのあたりのこともまた後ほど質問していただけたらと思います。また順
番にAさんからお願いします。

子どもA 私は今の奈良市はめっちゃ好きで、とっても過ごしやすいまちだと思っ
ています。歴史的文化財もたくさんあるし、とてつもなく汚いというわけ
でもないし、住んでいる地域の人が多すぎず少なすぎずで、活気があって
楽しいところなんですけど、きれいかって言われたらそうでもないと思う
ので、もし私が市長になったら、ゴミ箱をたくさん設置したいと思います。
テレビで見たんですけど、人はゴミを8メートル持っていたら、無性に捨
てたくなるらしいので、世界一有名なねずみさんがいらっしやる遊園地
では8メートルごとにゴミ箱が置いてあるそうなんです。だから、8メー
トルは難しいかもしれないですけど、もっと狭い間隔にたくさんゴミ箱を
おきたいです。さらに、きれいな花をたくさん植えたいと思っています。私
たちの学校のボランティアクラブでは、道路に、花咲きロードといってき
れいな花をたくさん植えて、雑草もこまめに抜いて、道をきれいにしてい
るんですけども、それをやっていなかったころは、たくさん雑草の間に

ゴミが落ちていたんですけども、きれいな花の上にゴミを落とそうと思う人はいないと思うので、最近きれいになってきたと思っているので花もたくさん。奈良はステキなところなのでぜひ多くの人に訪れてもらいたいですけど、観光客が増えたらゴミも多くなると思うので、奈良を富士山のようにはしたくはないので、ポイ捨てしづらい環境づくりに力を入れています。



都築氏 はい、ありがとうございます。学校の前の道をお花できれいにして、そのことで何か変わったなって気がつくこととかありますか。きれいになってまず素晴らしいことだけど、きれいにするを通して。

子どもA 地域の人がお花をいつもきれいにしてくれてありがとうとか、いつも水やりえらいねと声をかけてくださることだと思います。

都築氏 水やりも地域の人と一緒にしてるんだよね。

子どもA はい。

都築氏 ありがとうございます。では、一通り聞いてまたこちらにご意見を伺いたいと思います。では、Bさんお願いします。

子どもB 私が奈良市長だったら、まず奈良市をお金持ちにしたいと思います。お金持ちになれば学校などの公共施設や、道路などの整備が行き届くからです。市をお金持ちにしようと思ったらもちろん税収をあげなくてはなりません。税金の種類には、法人、個人の市民税、固定資産税、地方交付税などがありますが、今後の奈良市の傾向として、人口の減少、高齢者人口の

増加の傾向があり、個人からの増収は見込めません。よって、税収を増やしていくためには、産業の誘致が必要不可欠です。工場などの誘致条件として、幹線道路が整っていることが条件ですが、現状ではそれに適した場所がないように思われます。また、商業の誘致ですが、企業は儲かる見込みのあるところにしか来てくれません。リニア開通後ならともかく、今の奈良市ではなかなか難しいと思います。そこで考えました。競馬場を新設します。競馬場は京都にはありますが、大阪にはないので、競馬場を作れば大阪の人を奈良に呼ぶことができ、まちも活気づくと思います。しかし、競馬場を作ると、近隣住民の反対が起こってきて、反対の起きにくい場所として考えられるのは、秋篠の県営競輪場付近です。西大寺駅からの距離があるので、無料シャトルバスを走らせます。大和西大寺駅は、大阪からのアクセスもいいので相当数の集客が見込まれると考えられます。1300年の歴史、文化遺産はもちろん大切にしていかなければなりません。しかし、観光収入だけに頼らず、新しい発想、攻めの姿勢で税収を増やし、財政の健全化を図っていくことそれこそが急務なのではないかと私は考えます。

都築氏 はい、ありがとうございます。あとで、市長からのご意見伺いますからね。大胆なご意見ありがとうございます。では、Cさんお願いいたします。

子どもC 私が市長になったら、子どもから大人までが楽しめるイベントを増やしたいです。そうしたら、みんな仲良くなれるのでこういう意見交換とかもしやすくなると思います。あと、奈良にいっぱい観光に来てほしいので、奈良に来やすいように、今、電車とか来にくいって聞いたんですけど、線路とか繋いで欲しいなって思います。あとは、奈良は奈良漬とかあるんですけど、嫌いな人が多いじゃないですか。だから、テレビでやってたのは、奈良公園の付近でも京都のお土産とか売ってたんですよ。だから、もうちょっと食べやすい持って帰りやすいお土産を作ったらいいなと思ってます。あとは、もう少しきれいな緑を増やしたいです。山はいっぱいあるけど、荒れてるので、他のところはきれいにして、そこにも桜とか咲いていたら人がいっぱい来るけど、荒れていると来にくいので、奈良公園みたいにきれいな緑がほしいと思います。

都築氏 以上でしょうか。ありがとうございます。きれいな緑ね、いい言葉ですね。じゃあ続いて、Dさんお願いします。

子どもD　私が市長だったら、子育てをしている母親や父親の支援や、おやじ会とかのつながりを大事にできるようなイベントやルールみたいなものを決めていきたいと思っています。子どもは、大人がだらしのないに変わるわけではないじゃないですか。大人が変わらないと子どもは変わらないです。市も変わっていかないと、中身が変わっていかないので、どんどん、どんどん市で活発的にやっていけたら、あとはついて来てくれると思うので、親の支援やつながりを大事にしていって、少子化の解決にも繋げていけたらいいなと思っています。

都築氏　Dさんは、自分が子ども生むのはまだまだ先でしょ。でもなんで子育て支援とかいうことに思い立ったんだろ。

子どもD　お母さんとお父さんが、週に一回名古屋である勉強会に行っていて、過保護と過干渉の違いや、何で非行に走ってしまうのかとか、あまったれとか、わがままとか、私も一緒に聞きに行っていて、子どもの立場から考えても非行とかは共感できる部分もあるけど、やっぱり共感できない部分もあって、共感できない部分というのは、どこから生まれてきたかって考えると、やっぱり母親や育ててきた人だと思うので、変えていきたいなと思いました。

都築氏　素晴らしい。ありがとうございます。すごいね、そこまで深く考えるんだね。じゃあ続いて、Eさんお願いします。

子どもE　私が奈良市長になったとして一番初めにしたいことは、子どもと大人を逆転することです。今の奈良は大人たちの意見で成り立っているの、子どもたちの意見を優先して、奈良を作りたいです。大人たちに不満は必ず出てくると思います。でもその不満は、今の子どもが、いやって言うほど感じていると思います。つまり、子どもたちだけでは成り立たないし、大人たちだけでも、私たち子どもに不満が出てきます。そういうところを解ってもらうために、私は子どもと大人を逆転させたいと思いました。それほど、子どもと大人は意見が異なると思います。そして、二つ目にしたいことは、たくさん楽しく遊べる施設を作ることです。ビブレ、ドリームランドとたくさん遊べる施設が次々と無くなっていってます。それを改善したいです。私の住んでいる地区では、空き地がコンビニになったり、スーパーになったりしています。買い物する場所はたくさんあるから、次できた空き地には遊べる場所を作ろうと私は考えました。

都築氏 はい、ありがとうございます。子どもと大人を逆転させるというすごい発想、でも、とても大事かもしれませんね。じゃあ、Fさんお願いします。

子どもF 私が、奈良市長になったら、まず奈良市の予算を増やして、若者たちに楽しんでもらえる場所などをたくさん作って、都会に行った人に帰ってきてもらうことをします。理由は、今の奈良市は高齢者がたくさんいるので、このままだと少子高齢化が進んでいき、奈良市の将来を担う子どもが減っていくからです。また、奈良の世界遺産を世界にアピールして行って、観光客をもっと増やして活気のある都市にします。大仏などの世界遺産を世界にアピールして、世界中の人が日本に来てもらえるようにします。でも、そのままでは予算が入ってこないの、奈良公園は奈良市の人じゃないとお金がかかるようにします。そして、奈良公園にたくさんある鹿のフンをきれいにして、たぶん外国人があまり来ないのは汚いからだと思います。鹿のフンを踏んでしまうと嫌な人は嫌だと思うので、きれいにしてから世界にアピールするといいと思います。以上です。

都築氏 はい、ありがとうございました。それでは、Gさんお願いします。

子どもG 僕が市長だったら、自然を大切に、交通の便を良くしたいです。なぜなら、今でも狭い道やガタガタな道があります。でも、自然を極力壊すことのないように、空き地を、道を広げるために使ったり、交通量が少ないところに少しでも花や木を植えたりして、自然を増やすということもあるんですけど、子どもが自然ばかりで面白くないって言ったら、レジャー施設を大きい空き地に作ったりして、観光客も楽しめるようなところにしていきたいです。

都築氏 はい、ありがとうございます。さて、いろいろと本当に貴重な意見をいただきました。かなり具体的なプランを持っている人もいましたし。それではまた、もっと詳しく聞きたい質問等を含めながら、お話を伺っていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

仲川市長 たくさん意見をいただきましたが、時間の関係もあるので少しだけ質問をさせてもらえたらと思うんですが、一番衝撃的だったBさんの競馬場プランですけども、僕も話を聞いているときにどこに持って行こうかと考えていたんですが、ああ競輪場があるなと確かに思いました。広さが足りるかどうかは調べてみないとわからないですけど。なぜBさんは競馬場だったら儲かると思ったのか、何かきっかけがあれば教えてもらえますか。

子どもB 競輪場より、競馬場のほうがニュースとかで扱われていて、人気があると思うんですよ。だから、人気があるっていうことは、それほど人がお金を使っているということだと思うので、作ったら、奈良でついでにお金を使ってくれるのではないかと。

仲川市長 なるほど。中学生の発想にしては、非常に渋い案かなと思うんですけども、たぶん行ったことはあんまりないかと思うんですけどね。なんとなく他のお友達が言ってることを聞いてると、ショッピングができるとかレジャー施設とか、そういう話が多いように思うんですが、そういうものよりも、やっぱり競馬場の方が経済効果が大きいというイメージですか？

子どもB やっぱり奈良市は借金してると思うので、まずそれを無くしてお金持ちにしたなら、いろんな設備も簡単にしていけるから、もっと住みよいまちが作れると思います。

仲川市長 ありがとうございます。まだまだこれは議論をしたいところですが、朝まで生っていうわけにはいきませんので。そしたら、もうひとりだけ話を伺いたいんですけども、Fさんの、都会に出て行った人に戻ってきてもらって、人口を増やそうという話があったと思うんですけど、これは例えば、Fさんの身の回りで、奈良からどんどん人が出て行っていくということがあったのかな。それとも、ニュースや新聞でその話が出てきたんでしょうかね？

子どもF どっちもあるんですけど。僕も奈良で生まれてから大阪に行って、また奈良に帰ってきたり、僕のおじさんが東京に行ったり都会にどんどん出て行って、僕の地域は、おばあさんとおじいさんばかりなんですよ。あと、新聞とかでは、関東周辺に三千万人が住んでるって聞いて、北海道とかは広いのに住まないのは何でかなと思ったり、まあ寒いとは思いますが、名古屋とか普通の土地にもみんなどんどん行って、奈良も夏はそんなに暑くないし、冬も奈良市はそんなに寒くないと思うので、都会に行った人に戻ってもらうことで将来が良くなっていくと思います。

仲川市長 ありがとうございます。今、Fさんが言ってくれた予測は非常に正しくて、奈良市に引っ越してくる人、出て行く人が毎年いますが、25歳の人、年齢でいうと一番県外に出て行きます。だからまさに学校を卒業して、仕事を始めたぐらいの人が県外に引越しをしていくっていう割合が非常に高いんですね。一年間で18%の人が外に出て行きます。25歳の人、100人いたら18人の人が一年間で県外に引っ越していくという状況

ですから、おっしゃっていたように、街に出て行った人が、例えば子育てをする時に奈良に戻ってきてもらうような環境を作ることが、これは非常に大事なことになると思いますので、さっき、子育て中の話もDさんから出ていましたけれど、子育て環境を良くするっていうのは、子育てをしている人だけがメリットがあるっていう話ではなくて、人が増えて、税収が増えたら、子どもからお年寄りまでみんなにメリットがある話になりますので、そういった意味で奈良市も今いろいろと考えてます。また具体的にどういうふうになれば、出て行った人が帰ってきてくれるか、ほかのみんなからもアイデアがあれば教えて欲しいと思います。

子どもB 奈良に人を増やすためには、交通の便をもっと良くしたらベッドタウンとして発展させていくことができると思います。商業施設もイオンしかなくて、めっちゃ混むし不便なので、生活が楽にできるような環境を整えたらいいと思います。

仲川市長 遠くのイオンまで行かなくても家の近所で買い物したり快適に生活ができるようなまちにすれば、みんな戻ってくるということですね。ありがとうございます。

都築氏 Fさんも何かあるようですね。

子どもF 違う考えなんですけど、ドリームランドをまた遊園地として再開したら、小学生や幼稚園の人、子連れの親とかも来ると思うので、あそこを何かに再利用したら、大阪とかからも来る人が増えると思います。

仲川市長 確かに。あやめ池遊園地も無くなったし、県営プールも無くなったし、どんどん遊ぶ場所が無くなってきているので、これもまた経済対策というか、新しいまちの発展につながる事業で案を考えたいと、今ちょうど市役所の中でもいろんな話し合いをしていますので、また議論を深めていきたいなと思っています。ありがとうございます。

都築氏 それでは、サミーにお願いしてもよろしいでしょうか。

木下副委員長 結構いろんな意見がでて、私も、奈良公園とか緑が豊かで憧れるようなところだったんですね。しかし、さっききれいな緑を、とか鹿のフンとかの話がでて意外でしたね。住んでるわけではないから実際はイメージと違うんでしょうけど、国際的に売っていくにはどうしたらいいのか、富士山だけの問題ではなくて、奈良も世界遺産とかを絡めながら世界に売ってい

くってというのは執行策として非常に大切なことだと思うんですね。ひとつユニークな発想の子どもと大人逆転のEさん、すごいなと思ったんですね。さっきの大人は忘れるっていうBさんの意見と絡めて、やってみたら大人もすごい考えるんだろうなど。それから、競馬場とか攻めの姿勢、今の安倍さんのようなね、ミッションを持つというのは非常に大事なことだと思います。似たようなところで、子ども参画の取り組みで、子どものまちっていうのがあります。奈良でやっているかどうかはわからないですけど、やってないですかね。子どもだけが働いて、議会も市長も、先ほどみなさんが言ったように選挙演説で言って、投票も子どもだけ。お店も食べ物も、そこで働いたお金で楽しめるというごっこ遊びの大きいものだけど、本当に大人のまちで起こっていること、さっきのような公約を掲げて出るんですね。それは、逆転するっていうことと似ている。うちの子どもは、園では買えないけど、そこで働いたお金でお父さん何食べたかって聞いてくれたり、そういうのどうですかね。他にいい仕掛けというか逆転するっていうのありますか？

都築氏 ヨーロッパではそういう取り組みっていうのもあるっていうのは知ってましたか？日本でもね。どうしたら大人がもう一度子どもの感覚を取り戻せるようなことってある？

子どもE 今の大人の意見を子どもたちの意見に変えて考えてみたら。子どもたちがやっていることを大人も一緒にすると昔の感覚が戻ってくると思います。

都築氏 みんなが今大人に対して意見を言ったりしますよね、それを大人の方が自分自身の感覚として一度しっかり取り組むっていうこと？

子どもE ・・・そういうことです。

都築氏 ごめんね。私の理解がちょっと足りないのかもしれませんが。ありがとうございます。他にどうでしょうか？みんなの方からはどうでしょう？こちらの仲川市長はじめ、浜田委員長、サミーに、さっきいろいろ発言がありましたけれども、それ違うよとか、そこもうちょっと聞かせてとか何でもいいです。質問があったら。あるいは、もっともっと言いたいことがあったら発言したい人何でもいいです。手をあげてください。では、Dさんお願いします。

子どもD 単純にいつも思っていて言いたいことなんですけど、学校の教科書が大

きくなってきています。授業数も増えてきています。私の学校は今年から、水曜日5時間だったのが6時間になって部活の時間が少なくなってきているんですけど、教科書は大きくなって太くなってきているのに、机は小さいままだし、ロッカーも小さいままで収納ができないということと、授業の時間が増えて教室にいる時間が多いのに、なぜか教室の設備はそのまま、扇風機だけとか。黒板が小さいとか。その状況で学生が誰かにあたるのもおかしくはない状態ではないかと思うので、学校をもっと変えてほしいなと思います。

仲川市長　これは、去年の夏のときにも出ていたので、教育委員会に話を聞きましたところ、机は大きいサイズに順番に入れ替えをしているようです。そちらの中学校は古いままなんですかね？もしかしたら、一気にいけないから順番にいつてるかもしれないんですけど、確かに教科書大きくなって、机の上が狭いからこれは今順番に入れ替えをしているようです。なので、もうちょっと待ってもらえたら有難いかなと思います。

都築氏　ありがとうございました。

木下副委員長　生活の場で、学校とか園庭とか、さっきFさんが言ってたけど、ボールが飛び越えていくっていうのは、先生とかに言えるのかな。フランスでは幼稚園、保育園とかでも子ども代表委員というのがある、みんなの意見をまとめて園長に交渉するっていうのがあるんですけど、そういうのってみなさんの学校にあります？生徒会の人いるよね。そういうことってあるのかしら？細かいことを聞いて先生たちに言って改善したりとか。

子どもA　私の所属している生徒会執行部は、みんな割りと文句言いなので、結構先生方にここはこうして欲しいとか言っているし、生徒総会でも学級のみんなからクーラー付けて欲しいとか、扇風機を増やせとかお茶を冷やせとかいう意見がきて、でも、執行部なんで反対意見を出さないといけないんですよ。それで執行部はなんでそうやねんと言うことを言われてるので、それについて文句言っても、まあまあまあとしか言ってもらえないんですけど、一応意見は言ってるんですけど、あまり真剣には捉えてもらっていないように思います。

都築氏　なるほど。大人にとっては、まあまあくらいの問題だけど、さっきDさんが言ったように不満がたまっているっていうのを実感しているわけですよ。それからFさん手あがってましたね？

子どもF 小学校のときに運営委員会をやったんですけど、そのとき話し合うことは学校で決められたユニセフのことなどしか話し合えなくて、やっぱり予算が厳しいから、先生は、今はぜいたくしないって言うてくるし、ボールが飛んでいったら先生が拾いに行ってあげるからとか。ボールが飛んでいったら昼休み25分あるんですけどなくなるんですよ。また新しい遊びを始めるのも時間かかるし、明日までに取りに行ってもいいって言われて、次の日にはボールが無くなっていて遊べなくなったりしました。

仲川市長 今のお金の使い方とか、みんなの希望とかの話なんですけども、これは結構、学校の子どもたちの話でありながら、一方で地域の話も同じなんです。みんなそれぞれにこうして欲しいっていう思いを持ってるんですけども、なかなかそれがまとまった形で優先順位を付けたり、限られたお金の中でどういように順番をつけてお金を使っていくかということがうまく繋がっていないんだと思います。例えばみんなが学校にクーラーつけて欲しいとか、あれも欲しい、これも欲しいっていう話だけだったらお金がないからダメですっていう話になりますけども、例えば一年間で学校には100万円の予算があります。その100万円の予算をどういう優先順位で使うかっていうことを決めるときに子どもの声を聞いて欲しいという話ならたぶん聞ける余地はあると思うんですね。例えば、先生はこの雨漏りを直すことを一番の優先順位に考えたけど、生徒たちは、そこはいいからトイレのガラスを直して欲しいとか、そういう入れ替えは可能だと思うんです。全体の予算は限りがありますけど。だからそういう意味では、生徒会なり、何か子どもたちの意見をまとめる場で、みんなが学校に対して要望する事柄を、例えば3つ、5つに絞って提案してもらおう。それが、学校なり市役所なりができないなら、なぜできないかを子ども側にちゃんと答えを返すキャッチボールをしていけば、みんなも、何でここはいつもお金がつかないのかなと思ってたけども、実はちゃんとした理由があって、いやどうしてもそれはできないってことがあるのかもしれないし、逆に、大人側が子どもにとってこれが一番だと思ってても、実は子ども側はそれが一番だとは思ってなかったりっていうミスマッチもあると思うんですね。だから、これからみんなが意見なりを例えば紙でまとめて、学校なり市役所なりに文書で回答を求めるとい形になってくればですね、やりとりも前を向いて進んでいくかなと思いますし、大人の側も子どもの声だからまあまあ我慢しなさいだけではなくて、きちんと理由をつけて答えを返すとか、もしくは、限られた中でどういうふうな順番をつけるか一緒に考えると、これからそういう作業も必要かなと思ってみんなの話を聞いていました。

都築氏 ありがとうございます。まあまあで済まさない。そしてみんなの不満をためない。ぜひどうすればいいかっていう具体的行動を。はい、Cさん手があがりかけてます。

子どもC みんなと違う意見なんですけど、クーラーとかつけるのもお金が無いし、時間もかかるじゃないですか、もちろんつけて欲しいんですけど、何か用事があって職員室に行ったときに、もうめっちゃ寒いくらい温度が低いんですよ。長袖を着ている先生も中にはいるんですよ。それなら、温度を上げたりして欲しい。授業でみんなが暑いって言うときに、もうちょっとや頑張れって言うってくれる先生もいるんですけど、これくらい我慢できるやろって先生もいて、自分たちはあの涼しい職員室でさっきまでいたやんて、すごいイラつくんですよ。もったいないというか、無駄遣いが学校にはすごく多いと思うんですよ。プリントも両面印刷したらいいのに、片面だけすごい量を配って、こっちの頭の中もいっぱいになって、細かいことなんですけど、それがイラつくんですよ。だから、ちょっとずつでいいので子どもに言う前に大人が見本を見せて欲しいです。

都築氏 ありがとうございます。観察力が素晴らしいですよ。Gさんはどうですか？何か言いたいことはないですか。そろそろ時間がなくなってきたんだけど・・・。

子どもG 学校のテレビ教材とか使っていない先生とかいるんですけど、統一しなくていいんですか？

仲川市長 そうですね、テレビの形のものですよね。僕も学校現場へ見に行ったんですが、年齢の高い先生たちの中には、正直、使いこなせない先生がいるかもしれません。本当は、あれは学校に一台ずつなんですよ。都跡だけがモデル校なので教室に一台ずつになっています。だけど、本来は全部の教室に一台ずつ置いたほうがいいし、それを先生がちゃんと使いこなさないとダメなんですけど、まあそのうちに、今、タブレットの方が主流になってきています。奈良市でもモデル校にタブレットを配って、タブレットの教科書で授業をどんどんやっていけば、最新の情報が出せますし、子どもたちも、例えば天体の話でも、教科書は紙だから動かないよね、でも、タブレットの教科書なら、時間とか季節に応じて動く姿が動画で見れるからすごくわかりやすい。そういうことは、今どんどんやっていこうと思っていますので、どちらかといえばあの画面は将来ただのテレビになって、タブレットの方が先に普及するようになるかもしれないと思っています。

都築氏　　はい、ありがとうございました。それと、今日は客席のほうに検討委員のみなさんにもお越しいただいております。どうぞ一言ずつ今のやり取りを聞いてのご感想など言っていただけたらと思います。まずは、奥田委員からお願いいたします。

奥田委員　　奥田と申します。今日はとても刺激的なご意見をありがとうございました。客席のほうから、周りのお声とみなさんの表情を見比べながら聞いてたんですけども、みなさんが細かいご指摘も含め、いろいろ言っていたことですね、うまく笑いもとれているところもあったんですけど、後ろは笑ってるんですけど、みなさんの表情はすごく真剣やったんですね、なので、受け止めて欲しいというすごく強い思いが伝わってきました。大人側の受け止めが無いといいますか、やっぱりどこかで「そんなこと」というように思っているところがあるのかなと感じながら聞かせていただきました。Dさんが、子育て支援の話をしてくださったんですけど、やっぱり、育てられたということを忘れてしまっている私たちがいますので、子ども支援、子育て支援と浜田委員長がおっしゃられましたけれど、子育て支援についてもみなさんに伺いたいなあと強く思いましたし、お年寄りとか障がいのある方ですね、子どもにやさしいまちづくりは、全ての人にやさしいまちづくりになっていくと思いますので、そのあたりのご意見もたくさん聞きながらやっていきたいなあと考えました。予算の話もありましたけれども、予算というのは学校現場では子どもたちと一緒に立てるべきなんだろうなと、市長のご意見も含め感じたところです。今日はありがとうございました。

都築氏　　ありがとうございました。では続いて原委員お願いします。

原委員　　原と申します。私も奈良市だけではなく愛知県の知多市とかで子どもたちと一緒に条例作りをしたり、いろんな意見を政策に反映するお手伝いなんかもしています。今日伺っていて感じたのは、もっと身近なところで子どもたちの声がちゃんと聞ける場が必要だなって感じました。そこは、子どもが話しをする場ではないので、大人と子どもが双方向で話しをする場でないと、いいものは作れないのではないかとすごく感じました。特にその場において大事なものは、大人が子どもの意見を、奥田委員もおっしゃられたように「そんなこと」と感じてしまうことが多いかもしれませんが、その発言の裏には本当は重要な問題が隠されていることがあって、これはユニセフの文書の中にも載っているんですが、「大人が子どもの声をちゃんと理解する能力を身につけなければならない」ということが書かれてあるんですけども、今日は本当にそうだなと思ひまして、今度、この子ども条

例を実際作っていくときに、ちゃんと私たち大人が、子どもたちの声を理解するという能力を身につけて、子どもと一緒にパートナーシップで作っていったらいいなと思いました。

都築氏 ありがとうございます。では最後に近藤委員お願いします。

近藤委員 神戸で大学の教員をやっております近藤と申します。今日は中学生のみなさんですね、内容も立派でしたけれど、壇上でこれだけ大勢の大人に向かっていろいろと意見を述べるのは、ほんとにすごいことだと思ひまして、関心しているところであります。大学の教員も壇上に上がってしゃべったりするんですけど、すごく緊張するものなので、立派なことだと思ひました。いろんな意見があったと思うんですが、大事なのはお互い心を開いてフラットな気持ちで大人と子どもが語り合うことが、大事なことなんじゃないかなと思ひています。大人と子どもだけではなくて、大人同士、子ども同士、さまざまな形で開かれた心で対応していく、そして、相応し続けていくことが大事なんじゃないかと今日のシンポジウムを聞いていて思ひました。どうもありがとうございました。

都築氏 ありがとうございました。浜田委員長、特にないですかね。

浜田
委員長 今日、逆転のことを言ってくれたEさん、市役所の方とかみんながおられる中で、一度関係を逆転させて欲しいと言ったことは大きいと思うんですね。私が女性に対してどんなことをしてるのか、障がい者の人に対してどんなことをしてきたのか、それは言われてみて初めて気づくこともあって、実は理不尽なことをしていたなというのは、言われてみてわかったんですけど、いろんな思ひを逆転させて欲しいって、ずっと逆転させて欲しいって言うわけではEさんもないと思うんですよ、一度私たちが対等な関係で話し合うためには、一度逆転させて欲しいって言うことだと思うんです。だから、みなさんのいる前で、逆転させて欲しいって言われたことの意味は、すごく大きいし、その中でどこまで聞けばいいのか、どこまで待てばいいのか、わがままじゃないのか、我慢を強いることになるのではないのかとか、しばらく大人と子どもはゆらぎが起こると思うんですけど、一緒に話せる関係、お互いが言いつばなしでない関係をこの条例をとおして作っていきたいなと感じました。ありがとうございました。

都築氏 ありがとうございます。本当に夜まで、朝までいろいろ意見を交わしあいたいところなんですけど、時間もまいりました。最後に仲川市長、一言お願いしたいと思います。

仲川市長 一年間の取り組みの中で、子どもワークショップのみなさんも回を重ねるごとに意見がどんどん深まって、自分の日ごろ気づいたこととか、おかしいと思うことを具体的な提案として、私たちにぶつけていただいたことがすごく貴重だと思います。確かに、今の大人中心の社会っていうのが皆さんの声を十分に反映していないのは、ひとつの事実だと思います。一方で、皆さん方も自分たちは今子どもでありながら、またもう少ししたらすぐに大人になるというそういうところもあると思いますので、年代を超えて、奈良のまち全体をみて、どういうまちにしていくかってところについては、本当に大人と子どもが対等な立場で一緒に意見を交換して議論をしていくことが大事だと思います。いつも、大人が立場が上で、子どもが下になるっていうのは、例えば与えられている情報量に差があるとか、ものを発言する機会が多いか少ないかとか、そういうことが元になっていると思うんですけれども、例えば奈良市だと、一年間どんなお金を使っているかはホームページに載っています。そうすると、簡単にいえば、みなさんが、自分が市長だったら、来年はこんなお金の使い方に変えようということも具体的に考えてもらうことも今できるようになっています。そういう意味では情報の格差というのは非常に低くなってきていると思います。あとは、立場の違いや発言の機会については、大人側がみなさんにもっと発言の機会を与えて、一緒に解決策を考えていければと思います。とにかく奈良は非常に古いまちですけれども、これだけ未来に向けて真剣に考えてくれている若い人たちがいるっていうのは、まちの将来につながる大きな可能性だと思いますし、まさに光を見た気がします。言葉では子どもが大事だとか、未来を大事にしようとかは、よく我々も使うんですけど、今日はみなさんが数年先に、実際に大人となって、このまちの中心で活躍している姿がなんとなく透けて見えるような感じがしました。もうあつという間のことだと思います。だからぜひこれから、一緒に、いいまちをつくらせていただくために、協力をしてもらえたらと思います。登壇してくれた7人の中学生の勇気と、そして奈良を良くしたいという熱い思いに改めて感謝をしたいと思います。本当にありがとう。

都築氏 本当にありがとうございます。客席の大人もそうですけど、皆さんがたから今日はいっぱい元気をもらいました。本当に光とおっしゃっていただけ、先が楽しみな感じがしてきました。まずは、この子ども条例ですね、素晴らしいものを作っていきたいと思いますので、ぜひ、大人と真剣

に話をしたいと休憩時間中も何人もの中学生が言ってくれてました。本当に有難いことだなと私は思いました。ぜひパートナーシップで素晴らしい条例をつくって素晴らしい奈良にしていきたいと思いますので、今後ともパートナーとしてよろしくお願いします。今日は本当にありがとうございました。改めて拍手をお送りください。

